

January / February
2021 No.9

A News letter from SCGO-JSOG Project
on Women's Health and Cervical Cancer

カンボジア 女性のヘルスプロモーションを通じた 包括的子宮頸がんサービスの 質の改善プロジェクト

JICA 草の根技術協力事業(草の根パートナー型)

PROJECT FOR IMPROVING THE QUALITY OF
COMPREHENSIVE SERVICES FOR CERVICAL CANCER

教育省関係者への啓発会合開催

小学校教員への健康教育や子宮頸がん検診には、保健省のみならず教育省関係者との合意形成が不可欠です。新型コロナウイルス感染症流行による小学校閉鎖や移動・集会制限の影響で延期されていた教育省関係者との会合が、2021年2月10日、ようやく開催できました。他省庁との協働の難しさに加え新型コロナウイルス感染症の影響も受ける中、カンボジア産婦人科学会(SCGO)が強い熱意をもって粘り強く交渉を続けた成果であったことは、特記したいと思います。

この会合を、プロジェクトでは「アドボカシー会合」と呼んでいます。カンボジア教育省代表はじめプノンペン市内小学校管理者約200名を招き、SCGOから本プロジェクトの概要や子宮頸がんに関する説明が行われました。国際渡航に係る制約により日本からの参加は叶いませんでしたが、SCGOよりカナル理事長はじめ代表の理事や学会員が参加し、JSOG岡本愛光常務理事(当プロジェクトのプロジェクトマネージャー)からのビデオメッセージも上映されました。

今回の会合により、教育省関係者各位からプロジェクト活動に対する理解が得られ、小学校教員への健康教育実施に向けた具体的な協議・調整を進める段階へと、大きな一歩を進めることができました。いよいよ本番に向け、教育省関係者と協議を重ねながら、カンボジアの状況に合った健康教育プログラム・教材開発を進めてまいります。

なお会合の様子は、JICAカンボジア事務所 Facebook と国立国際医療研究センター国際医療協力局 Facebook で紹介されています。

JICAカンボジア事務所:

<https://www.facebook.com/456373264408765/posts/3756137134432345/>

国立国際医療研究センター国際医療協力局:

<https://www.facebook.com/356790621023814/posts/3807607035942138/>

(国立国際医療研究センター 菊池 識乃)



教育省代表者とSCGO理事長ら



JSOG 岡本理事のメッセージ上映



会場の様子

国立クメールソビエト友好病院に HPV 検査機器を設置

1月13日、事業対象病院の一つ、国立クメールソビエト友好病院に、HPV検査機器 (careHPV®) が供与、設置されました。翌日から技師研修も行われ、これでカンボジアの国立病院3施設で HPV 検査ができるようになりました (民間病院を含めれば HPV 検査可能な医療機関はもっとありますが、高額なためアクセスできる人は限られています)。

careHPV®は、簡易化されたハイブリッド法でハイリスク型 HPV-DNA が 5000 コピー以上あれば陽性として検出される HPV 検査機器です。電池で作動し、水道がなくても使用可能で、比較的安価な、低資源国での活用を前提として世界保健機関 (WHO) の事前認証を取得したものです。前事業フェーズ (2015-2018) で、カンボジアでも、医師採取検体での careHPV®による定性検査結果は、PCR 法による HPV 検査結果と大きく変わらない (一致率 93%) ことが示されています。今後、この HPV 検査を使った検診を、いかに多くのカンボジア女性に受けてもらうようにするか、適切に陽性者をフォローし治療へつなげるかが課題です。

供与式の様子も JICA カンボジア事務所、国立国際医療研究センター国際医療協力局の各 Facebook で紹介されています。

JICA カンボジア事務所:

<https://www.facebook.com/JICACambodia/posts/3685041064875286>

国立国際医療研究センター国際医療協力局:

<https://www.facebook.com/kyouryokubu/posts/3784776088225233>

なお、当プロジェクトとも関連が深い子宮頸がんに関する論文が、Global Health and Medicine 誌に掲載されました。

<http://globalhealthmedicine.com/site/article.html?id=105>

(国立国際医療研究センター 春山 怜)



日本からも遠隔参加



careHPV®機器



供与式の様子

HPV 検査機器の技師研修

1月14-15日の2日間、クメールソビエト友好病院の病理検査室で、今後 HPV 検査を担当する4名の技師に技術研修を実施しました。初日の午前中は座学で検査の概要や器具・検体の取り扱い方法等を学び、初日午後と翌日は実技研修を行いました。作業手順を一つずつ確認しながら、細かな作業は手元に神経を集中させながら学んでいました。前事業フェーズで careHPV® を扱った経験があり、今回オブザーバーとして研修に参加した国立母子保健センターの技師が、自ら用意した資料を配って技術的アドバイスをを行うなど頼もしい一面も見られました。今後彼らの横のつながりにも期待したいです。

(当プロジェクト調整員 佐野 志野)



研修中の様子

～ ミニコラム ～

コロナ禍での日本帰国への道のり

以前(ニュースレターNo.7)、「コロナ禍でのカンボジア帰国への道のり」をお伝えしましたが、今回は逆バージョンの「日本帰国への道のり」をご紹介します。私は2020年4月にもカンボジアから日本に渡航したのですが、今回(2021年2月)はその時以上に出入国のハードルが上がっていました。

まず準備しなくてはいけないのは、出国前72時間以内の陰性証明です。プノンペン市内では、国立公衆衛生院で取得可能で、検査までの流れはスムーズでしたが、今回も太い綿棒で鼻の奥をグリグリされ非常に痛い思いをしました。我慢の甲斐あって、翌日無事に陰性証明を発行してもらい、閑散としたプノンペン空港へと向かいました。チェックイン時に、指定されたアプリをダウンロードし、名前・住所・飛行機の座席などの入力、QRコードの取得が求められました。そして無事、韓国経由で成田へと飛び立つことができました。

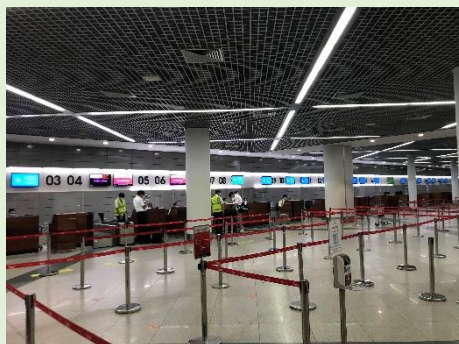
成田に到着後は、番号が書かれた椅子に順番に座るよう指示され、一人ずつ陰性証明を確認されます。書類に問題がなければ、日本側の検疫のPCR検査です。梅干しとレモンの写真が貼ってあるスペースで唾液を出すように言われたのですが、想像以上に苦戦し、結局私は鼻からの検査に変更になってしまいました。痛みを覚悟し身構えましたが、綿棒が細かったためか痛みはありませんでした。次に、搭乗前に取得したQRコードを見せて、その情報をもとに空港からの移動方法や保健所との連絡方法が伝えられます。最後に、検査結果を待つためのスペースに案内され、自分の番号が呼ばれたら確認に行き、陰性であれば晴れて通常通りの入国審査に進む事ができるのです。着陸から到着ゲートにたどり着くまで3時間もかかりました。

貸し切りハイヤーで滞在先まで移動し、その後14日間隔離生活を送りました。諸外国のような罰則がないとはいえ、手続きが煩雑で、気軽に海外渡航はできないと思わせるには十分な、非常にハードな旅となりました。

(当プロジェクト調整員 佐野 志野)



国立公衆衛生院のPCR検査場



閑散としたプノンペン空港



成田空港(到着後全ての乗客は指定の番号の椅子で呼び出しを待ちます)